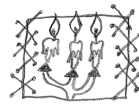


ライブ「キム・ヒョンジュン クリス  
マスファンミーティング2022」

(2022・12・14～15 立川ステージガーデン)



十二月十四日と十五日、昼夜二回、計四回のステージが開かれた。韓国の俳優にしてミュージシャン、金賢重キムヒョンジュンの歌とダンスとトークのライブだ。「優しくウイットに富んで知的で穏やかな上に可愛さまで備えた男がここにいます」と覚えきれないくらい長いタイトルがついている。私はそのすべてに参加した。

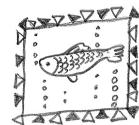
会場にはトレーナーやTシャツなど彼のグッズを身につけた人々が集まっている。私は慎ましくマスクだけ。

開演が近づくと、明りの落ちた会場に二千五百人の老若女子の捧げ持つペンライトが光る。そして開演。静かなラブソングの時はペンライトをゆつたりと左右に振る。ロック調の激しい曲になると一斉に立ち上がり、ペンライトと握り拳を前後に振る。私も皆に合わせてライトを振るけれど、ファルセットが流れる時だけは手を止めてじっと目を閉じる。そして霧雨のようなその声を全身に浴びるのだ。やがて祭りは果て、二日ほど余韻に浸る。ペンライトをぶって筋肉痛になった腕を愛しみながら。

(田中愛子)

中江裕司著『土を喰らう十二月』

(朝日文庫)



「暦の上での春といっても信州の寒さは厳しい」。沢田研二がしぶい初老の作家を演じた映画「土を喰らう十二月」にしんみりとしたので、原作を読もうと書店で探すと水上勉の原作本と並んで、この映画の監督中江裕司自身がノベライズした同名本がある。右がその冒頭で、映画の雪山のシーンとも重なって信州人の私のところを揅った。

「旬を喰らうことは土を喰らうことだ」。これがキーセンテンス。「ゴゴミはきれいに洗ったら鍋でさつと湯がき水にさらす。水鉢の中で舞う緑に目を奪われる。粗くすった胡麻と和えると気品ある薫りと苦みが引き立つ。土から出てきたものだから土器に盛った。土色に鮮やかな緑のらせん。自然の営みが皿に描かれる」。野のもの畑のものをどう活かすか。「精進の極意は季節を喰らうところにある」。読後、日々の妻の料理をととても有難く思った。

さて、水上原作との相違点は劇中で松たか子が演じた恋人の存在だ。この恋が切ない。もう一件、映画の料理を掲載の料理研究家土井善晴の写真集も美味だ。

(山田宗夫)